

SACLA 利用研究課題審査委員会を終えて

SACLA 利用研究課題審査委員会 委員長
 東京大学大学院 新領域創成科学研究科
 雨宮 慶幸

1. はじめに

2012年から供用が開始された SACLA における第2期の利用研究課題審査委員会（2013年4月～2015年3月）（以下、本委員会）の委員長を仰せつかりました。本委員会では、2013B 期、2014A 期、2014B 期、2015A 期の SACLA 利用研究課題審査を2年間にわたり行いました。以下に、本委員会での審査の概要を報告します。

2. 本委員会での審査に関して

2.1 審査方法に関して

審査は、第1期の利用研究課題審査委員会（2011年12月～2013年3月）における審査方法をほぼ踏襲して行いました。具体的には、以下がその骨子です。

1. SPring-8で行っているレフェリー・分科会・審査委員会の3段階の審査を、SACLA では分科会に分けず、レフェリー・審査委員会の2段階で行う。その理由は、使用できるビームラインが現時点では2本（BL2とBL3）であること、応募課題総数は3桁未満と予想されること、従って、分科会に分けるより本委員会で総合的に議論の方が効率的である、ということです。
2. 原則として、本委員会委員が全ての応募課題の審査を行い、本委員会で調整の上、選定案を決定する。
3. 重点戦略課題は、重要な利用研究課題であることを鑑み、ボーダーライン付近の課題については、一般課題に比して優先的な配分を行う。
4. 年間ビームタイム設定は、SPring-8と同様、24時間連続運転、および、同時期を想定する。ただし、1シフトは12時間とする。

2.2 レフェリーに関して

本委員会の施設外委員（19名）は、レフェリーとして、応募課題の、1) 科学技術的妥当性（絶対評価）、2) SACLA の必要性（絶対評価）、3) 総合

評価（相対評価）に関する審査を1課題あたり5名で事前に行い、本委員会に臨みました。施設側委員（5名）は、4) 実施可能性評価（絶対評価）、5) 奨励シフト数評価、6) 安全評価（絶対評価）の審査を事前に行い本委員会に臨みました。

2.3 本委員会での主な議論のポイント

本委員会では、上記のレフェリーによる審査の結果を踏まえて、総合的に課題の採否に関して議論を行いました。特に、供給できるビームタイムの制約との関係で、レフェリー審査結果が採否のボーダーラインの近傍にある課題に関して詳細に議論を行いました。その際、以下の点に留意しました。

- ① 委員（＝レフェリー）間の評価結果のバラツキの程度：採否ボーダーライン前後の課題（20～30課題程度）について、個別に各委員間の評価のバラツキを吟味。
- ② 科学技術的意義および SACLA の必要性（いずれも絶対評価）と総合評価の相関：上記ボーダーライン前後の課題について、科学技術的意義および SACLA の必要性と、総合相対評価との相関を吟味。
- ③ 重点戦略課題：ボーダーライン上の課題で一般課題と重点戦略課題の評価が同じ場合は後者を優先。文部科学省委託事業（XFEL 重点研究課題）に係わる課題については、「XFEL 利用推進計画（H24.2.1、XFEL 利用推進戦略会議）」における事項^(注1)および第4回 SACLA 選定委員会（H24.4.23～26メール開催）における審議結果を踏まえ、審査に際し一定の配慮。
- ④ 利用機会：申請者の多様性（申請者の重複、所属機関、国内外、産学、等）を確保するための配慮。

また、本委員会での議論の結果、不採択となった課題の申請者に伝える情報の中に、不採択課題の中

での評価結果が上位、中位、下位のどの位置にあったかの情報を盛り込むことにしました。

3. 審査結果の概要

2013B 期（140シフト）では、応募68課題に対して30課題を採択しました（採択率＝44％）。採択された30課題におけるシフト配分率（＝配分シフト数／要求シフト数）は55％でした。

2014A 期（147シフト）では、応募49課題に対して28課題を採択しました（採択率＝57％）。採択された28課題におけるシフト配分率（＝配分シフト数／要求シフト数）は60％でした。

2014B 期（140シフト）では、応募70課題に対して29課題を採択しました（採択率＝41％）。採択された29課題におけるシフト配分率（＝配分シフト数／要求シフト数）は70％でした。

2015A 期（144シフト）では、応募66課題に対して33課題を採択しました（採択率＝50％）。採択された33課題におけるシフト配分率（＝配分シフト数／要求シフト数）は56％でした。

以上のように、何れの期においても、採択率、および、シフト配分率は SPring-8 の場合に比べて低く、供用開始以来の SACLA 利用に対する要求の強さを感じました。なお、国外からの課題申請数は全申請課題数の34％であり、第1期（25％）に比べて増加しました。

4. まとめと今後の課題

SACLA が2012年（平成24年）3月に供用が開始されて、丸3年が経過しました。SPring-8 に比べてビームラインの数が圧倒的に少ないため、課題採択率が低くならざるを得ない状況が続いています。SACLA から価値ある成果が創出されるために、本委員会が果たすべき役割の重要性を改めて実感しています。

SACLA 利用研究課題の審査は、公平性と透明性をもって臨むことは大前提ですが、今後、利用できるビームライン数の増加、応募課題数の増加、それ

に伴う分野の広がり等々が予想されることから、引き続き、「走りながら考える」という柔軟な姿勢で取り組むことが必要であると思います。

最後になりましたが、活発なご議論をいただいた本委員会の委員の皆様のご尽力に感謝致します。また、本委員会の関係者各位に感謝致します。

雨宮 慶幸 AMEMIYA Yoshiyuki

東京大学大学院 新領域創成科学研究科

〒277-8561 千葉県柏市柏の葉5-1-5

TEL : 04-7136-3750

e-mail : amemiya@k.u-tokyo.ac.jp

(注1) < XFEL 利用推進計画 抜粋 >

「また、競争的資金や国のプロジェクトにおいて、審査・採択された課題については、すでに科学技術イノベーション推進の観点から重要性が認められているものと考えられることから、その結果を尊重し、登録機関で行う選定においては一定の配慮がなされるべきである。」